

地域資源および教育資源としての下仁田産桑茶の可能性

Possibility of Shimonita Mulberry Tea

As Community Resources and Educational Resource

萩原 豪*, 豊田 正明**

HAGIWARA Go Wayne*, TOYODA Masaaki**

*高崎商科大学, **高崎商科大学

[要約] 本研究は、高崎商科大学における授業の中で、群馬県下仁田町の特産品のひとつである桑茶を教材として用いて「観光まちづくり」の提案を行っていくというプロジェクト（桑茶プロジェクト）を通じて、本学学生や地域住民に対し、特産品としての桑茶と産地である下仁田町およびについて広く伝えることを目的としたものである。彩霞祭（大学祭）および学内で実施したプロジェクトを通じて、地域資源である桑茶はESDの手法を用いることにより地域を包括的・俯瞰的に捉える、可視化するための教育資源としても有効であることを明らかにした。

[キーワード] ESD、地域資源、桑茶、群馬県下仁田町、地域志向型教育

1. はじめに

高崎商科大学では、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC）の採択を受け、地域志向型教育研究費を設定している。本報告は平成27年度地域志向型教育研究費に採択されたプロジェクトであり、群馬県下仁田町の特産品のひとつである桑茶を教材として用いて「観光まちづくり」の提案を行っていくこと、また本プロジェクトを通じて本学学生や、彩霞祭などを通じて地域住民に対し、産地である下仁田町および桑茶について広く伝えることを目的としたものである。本プロジェクトは主として「教養演習Ⅱ」（2年ゼミ）を対象に授業内容の一環として展開したほか、活動に興味関心のある学生有志を合流させて取り組んだものである。問題発見課題解決型教育（PBL）だけではなく、情報発信能力の育成（活動内容を逐次研究室ウェブサイトで公開）、地域の持続可能性を見据えた複眼的思考の醸成、という新たな形でのアクティブ・ラーニングを展開した。

2. ESDと観光まちづくり・地域資源

「地域資源」を活用した「観光まちづくり」を進めていく上では、地域住民が地域にある自然環境だけではなく、歴史・風俗などの生活文化を含めて、何を活用することができるのかを考えていく必要がある。ESDの手法は、地域を包括的・俯瞰的に捉えるために有効活用することができる。

2. 1 「観光まちづくり」とは何か

「観光まちづくり」という言葉が使われるようになって久しく、今日ではさまざまな場面でこの用語が用いられている。「観光まちづくり」とは「観光」と「まちづくり」を組み合わせ合わせた、いわゆる造語だが、それぞれ対極に位置する言葉を組み合わせたともいうことができる。「観光」の主役は観光客（来街者）であり、訪れた先では「非日常」を求めるといった傾向にある。それに対して「まちづくり」の主役は地域住民（在住者）であり、今住んでいるところをより良いものに、あるいはその地域を活性化することを目指している。アジア太平洋観光交流センター（2000）は、これまでの観光開発が経済重視の側面が大きく、

乱開発による地域資源の破壊、ゴミ問題や交通渋滞などによる生活環境の悪化などの反省に立ち、観光客と地域住民が対立することなく地域資源を多くの人々が享受することができるようにすることが、「観光まちづくり」では重要であると述べている。そして、望ましい地域づくりのあり方として「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業など、地域のあらゆる資源を生かすことによって、交流を振興し、活力あふれるまちを実現するための活動」を「観光まちづくり」として定義している¹⁾。

2. 2 「地域資源」とは何か

この「観光まちづくり」の定義では、「地域のあらゆる資源」という表記がなされている。これは一般に「地域資源」と呼ばれるもので、「地域の中に存在する特徴的なモノやコト」を「活用することができる資源」として見なす、という前提に立っている。活用の仕方はさまざまあり、例えば農産物や魚産物には、生産地名と商品名を組み合わせることで多く見られる。「夕張メロン」「小美玉メロン」、「下仁田ネギ」、「大間まぐろ」などがその代表例として挙げられる。これら生産地名をつけた農産物や魚産物が「地域ブランド」として確立されると、他の地域との差を出して売り出すことが可能になり、地域の経済活性化に繋がっていく。また観光地であれば、これらの商品はその地域の代表的な土産品となるだろう。農産物や魚産物以外にも、地域に存在する歴史的建造物(寺社仏閣など)や、自然景観などが「地域ブランド」化されることもある。最近ではユネスコが登録を進めている世界遺産(自然遺産・文化遺産・複合遺産)や無形文化遺産、「世界の記憶」(世界記憶遺産)などが地域ブランドとなっており、観光客を誘致するための「地域資源」としての有効活用が期待されている。

2. 3 地域資源としての桑茶

特産品として桑茶を挙げているところは群馬県だけではなく、宮城県気仙沼市、岩手県北上市、島根県桜江町、鹿児島県霧島市、鹿児島県知名町(沖永良部島)などがある。しかしながら、桑茶そのものがメジャーな存在ではなく、どこの地域でも地域資源としての桑茶を活用できていない状況とすることができる。桑茶に関する研究論文については食品化学系に多くあるが、地域資源としての研究報告については報告が非常に限られている。神奈川県相模原市で生産されている桑茶に関する報告以外は、島根県桜江町の桑茶の事例のみ報告が成されている状況である²⁾。また桑茶を教材として用いた事例としての報告については、現時点では確認できていない。本プロジェクトは、地域資源として桑茶を位置づけるだけではなく、地域資源を活用した教材例として桑茶を位置づけることを試みるものである。

3. 桑茶プロジェクトの実施内容

本プロジェクトでは、次の4つの活動展開を計画した。(1)若年層(ここでは本学学生を想定)に対する桑茶のPR活動の展開、(2)学内における桑茶に対するモニター活動の展開(試飲会の開催およびモニター募集)、(3)桑茶を用いた新しいメニューの開発、(4)彩霞祭(大学祭)における桑茶カフェの出店。特に(4)に記した彩霞祭(2015年10月24日~25日)に桑カフェを出店することで、(1)と(3)を同時に行うことを達成している。なお、(3)については、試行錯誤の上、桑茶パウダーを用いてババロアやクレープを販売した(図1および図2)。

桑カフェの出店および桑茶メニューの販売だけではなく、下仁田町や桑茶の効能に関する情報をポスターにして掲示するなどして、下仁田町および桑茶に関する知名度向上のための活動も行った。掲示物などの資料につい

では、下仁田町観光協会や桑茶生産者である神戸萬吉商店から提供を受けた。

彩霞祭における活動計画はほぼ実施をすることができ、一定の成果を得ることができたと言えよう。



図1 桑茶カフェ入口の掲示物



図2 桑茶カフェの内部の様子

その他、特に学内において桑茶の認知度を上げることに注力し、彩霞祭での桑茶カフェ出店以外に、2016年1月12日と13日の2日間に桑茶試飲会を実施した。この時も桑茶だけではなく、桑茶パウダーを使ったスイーツ（パウンドケーキ）を作って配布した。また、桑茶を持ち帰って自宅での飲料に供してもらうため、桑茶の茶葉をミルで粉碎して、持ち帰り用の桑茶（薬包のように一回分を入れたもの）を配布した（図3）。

10月下旬に開催された彩霞祭の後、1月中旬に再び桑茶のブースを学内に設置したこと



図3 桑茶試飲会

により、学内における下仁田産桑茶の認知度はさらに向上したと言えよう。また、(3)については自分たちでメニュー開発をする以外に、京都在住の専門家から協力を仰ぐことができ、現在も新商品開発を進めている。(2)の桑茶モニターについては、桑茶の提供方法に試行錯誤したため、2015年度内には実施することができなかつたため、来年度に改めて実施することを予定している。これらの成果は2016年度以降に予定している下仁田町における桑茶カフェ出店および観光まちづくりの展開に役立てたい。

4. 成果と課題

彩霞祭（大学祭）および学内で実施したプロジェクトを通じて、地域資源である桑茶はESDの手法を用いることにより地域を包括的・俯瞰的に捉える、可視化するための教育資源としても有効であることを明らかにすることができた。下仁田産桑茶は、その特産品の存在自体は地域住民には認識されているものの、それが地域資源としてどのような価値を持っているのか、ということは主として生産者だけが知っており、周囲の人や県民はその特産品を「当たり前」のものとして受け止めてしまっている嫌いがあった。本稿では「6次産業化」という言葉を用いたが、他者（ヨソモノ）であったとしても、その別の視点を

用いることができれば、生産者を含めた地域住民・団体との連携を図ることができる。

大学の授業において地域をテーマとしたESDをどのように進めていくか、ということは自分たちが毎日生活している地域を広い視点で捉え直すことにつながる。着目するのは特産品などだけではなく、その地域がこれまでに育んできた歴史・文化・風習・自然環境など、その範囲は多岐にわたる。

いずれの地域でも、関心のある一部の人を除き、多くの人はその地域資源をまた、地域を歩いて地域の方と話す機会があると、必ずと言って良いほど「ここは何もないところだから」と言われる。本当に「何もないところ」なのだろうか。実際には「何もない」のではなく、いろいろなものがあるけれども身近すぎて見えていないため、それらを価値のあるものだと思っていない、ということではないだろうか。ESDの手法は地域を包括的・俯瞰的に捉える、可視化するために有効である。またESDは大学と地域を結ぶだけではなく、学生と地域住民、あるいは地域住民同士を結びつけることができるための有効的な手法と言えるだろう。地域資源となるモノやコトを発掘すること、また発掘した地域資源の利活用の方法を検討すること（発掘した地域資源を観光まちづくりや新しい特産品の開発やプロモーションなど）、これらを大学と地域で相互協力・連携をしながら進めていくことができれば、学生にとっても地域にとっても有意義であると考えられる。

本プロジェクトは授業で実施したものであったが、授業ではESDの手法を用いながら、受講生たちに地域と地域のつながり・支え・絆、というものを気づいてもらい、実践することができた。ESDを「人々が持続可能な社会の構築に主体的に参画することを促すエンパワーメント」とするならば、授業が終わった後も、授業の枠組みを越えて、学生たちが自主的にプロジェクトをつくりあげていくこ

と、実際の行動に移していくことができるのであれば、授業でESDを実践したことによる波及効果として捉えることができるかもしれない。

《付記》

本稿は、2016年8月5日（金）～8月7日（日）に学習院大学（目白キャンパス、東京都豊島区）にて開催された、日本環境教育学会 第27回大会（東京）で発表した内容を大幅に加筆・修正したものである。

《謝辞》

本稿は、平成27年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に基づき、高崎商科大学平成27年度地域志向型教育研究費「地域資源および教育資源としての下仁田産桑茶の可能性」による助成を受けた成果の一部である。

本研究を遂行する上で、下仁田町観光協会および、本プロジェクトで用いた桑茶の生産者である株式会社神戸萬吉商店から多大な支援をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

1 アジア太平洋観光交流センター研究会（2000）『観光まちづくりガイドブックー地域づくりの新しい考え方〜「観光まちづくり」実践のために』（財）アジア太平洋観光交流センター、p.26。

2 神奈川県相模原市で取り組まれている桑茶の事例については、次の文献で紹介があるだけで、続報などは出ていない。山崎康夫（2003）「さがみの桑茶」による差別化戦略事例『流通ネットワーク』167、pp.16-19。

他方、島根県桜江町桑茶生産組合の取り組みについては、比較的多く取り上げられているが、それでも以下の3点しか見当たらない。古野利路（2010）「桑茶、柿茶を本気で売るノウハウ（島根・桜江町桑茶生産組合）（草と葉っぱの売り方ノウハウ）--（お茶で売るノウハウ）」『現代農業』89(7)、pp.114-119。竹本昌史（2011）「地域再生の現場を行く（第115回）お荷物の桑畑が地域の宝に。健康茶の新産地として再生（島根県、桜江町桑茶生産組合）」『経済界』46(3)、pp.128-129。神田竜也・光武昌作・榎本隆明（2013）「島根県・桜江町桑茶生産組合の事業展開とその成功要因」『地域地理研究』19(1)、pp.22-38。

なお、ここで生産地として挙げている群馬県、鹿児島県、岩手県の桑茶に関する報告事例は見当たらない。